

小曾根遺跡分布調査記録

昭和52・53年度

1979.3
豊中市教育委員会

小曾根遺跡分布調査記録 周辺の概要



第1図 小曾根遺跡の周辺

小曾根遺跡の所在する豊中市の南東部は、かつて小曾根村とよばれた所で、北を千里丘陵、南を神崎川、東西は千里丘陵から神崎川に流れる高川および天竺川によって区切られた地域である。広々とした水田地帯であったこの地域の考古学的な調査は、これまで全く手つかずの状態できたというが正確であり、ようやく近年になって調査例が増し、しだいにその様相がわかるようになってきた。

小曾根地域の古い遺跡は、小曾根遺跡であり、弥生時代前期から中期初頭に比定できる弥生式土器が出土している。この遺跡は、その後古墳時代を経て歴史時代の中世に属する時期までのものが断続して複合している。小曾根遺跡の北東 500 m で近年発見された外縁遺跡は、弥生時代後期に始まる遺跡で、小曾根遺跡と同様に中世までのものを複合している。この他歴史時代のものでは、北 700 m に石蓮寺廃寺があり、南西 300 m には中世館跡である府指定史跡春日神社南郷日代今西氏屋敷などがあるが、これらは調査の進んでいないもので、今後の課題である。

調査の成果

今回の分布調査は、小曾根遺跡の南西部にあたる地域と考えられる。調査は4件の農地転用届に基づいて実施したものである。

- 第1調査地点 豊中市浜1丁目275-3・同275-4……昭和52年12月8日～同14日
 第2調査地点 豊中市浜1丁目 261……………昭和52年12月14日～同17日
 第3調査地点 豊中市浜1丁目453-6・252 ……昭和53年4月30日～5月5日
 第4調査地点 豊中市浜1丁目277-1・278-2-1…昭和53年10月24日～同28日

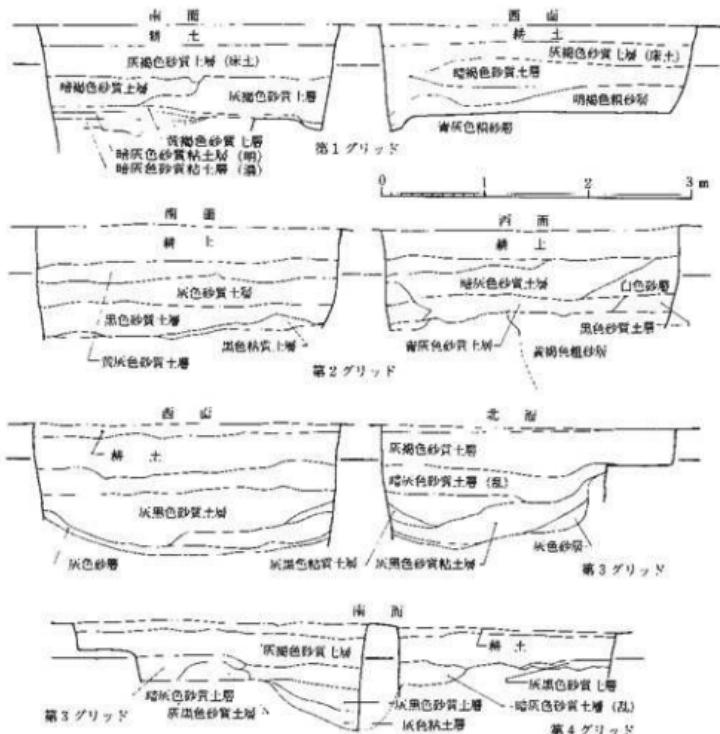


第2図 調査地点及び遺構の概要

* 調査実施については、土地所有者である大前繁氏・株式会社丹羽工務店・古川長作氏・上原幸一氏より協力・援助を得た。記して感謝の意を表する。

第1調査地点

第1グリッド 第1層耕土および第2層灰褐色砂質土である床土を除くと暗褐色砂質土があらわれる。この層が遺物包含層で中世に属する瓦器等を含んでいる。包含層の下層は明褐色の砂の層であるが、南東方向に低くなっている。さらに下層は青灰色の細砂層となり、この付近の地山を形成している。グリッド南壁に接して浅い落ち込みがあり、この中に瓦器碗が出土した。他の遺物としては土師器・磁器等があり、ほぼ完形に近いものも出土している。



第3図 第1調査地点断面図

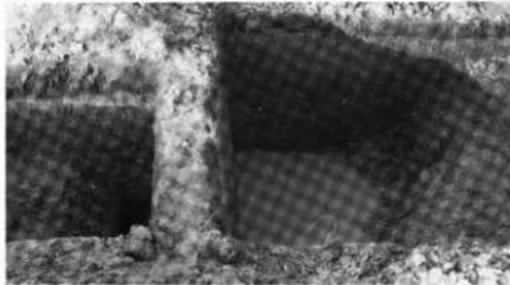
第2グリッド 耕土下は北西隅に白色粗砂層があり南東方向に傾いて堆積しており、南方向からも傾いた砂層があり、水平な堆積状態を示すこの付近の床土とは若干異なった様子を示している。最下層青灰色細砂層の北西部は大きくえぐられて小礫を含む黄褐色粗砂層が堆積し、この中には古墳時代や奈良時代に属すると考えられる小さな土器片が埋没して流れこんでいる。

また青灰色細砂層は南東方向にも深さ10cm位の浅い落ちこみになっており、この中には中世遺物を含んでいる。両側に落ちこむ青灰色細砂層の上面には薄い黒色粘土層があり、この面で径10cm・深さ10cm、また径30cmのピットがみられた。この中の遺物は数片であるが、中に弥生時代後期のものと考えられるものが含まれている。この層については周辺のグリッドでは検出されていない。

第3・4グリッド 第3グリッドでは西側半分が落ちこみになっているため、西側に第4グリッドを設定した。この落ちこみは上端幅が約4m位のものと考えられ、深さも1m強をはかる大きなものである。北側へは同じ状態で続くものと考えられるが、南側はグリッド南端で終っており溝状を呈するものではない。第4層上面から落ちこむもので、第3層包含層は痕跡的に残っているにすぎない。第4グリッド第4層上面で1ヶ所ピットを検出した。径10cm・深さ20cm位のもので柱穴と考えられる。第1グリッドにかけて何らかの遺構があるものと考えられる。

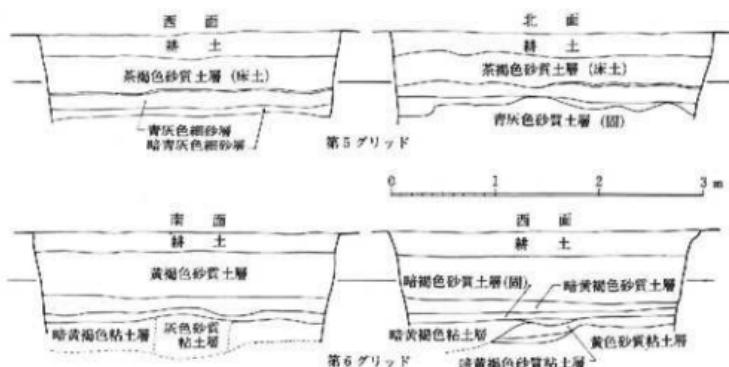


第4図 第1調査地点全景



第5図 第3・4グリッドの状態

第2調査地点



第6図 第2調査地点断面図

第5グリッド 第1層耕土下は床土である茶褐色砂質土層が約30cmの厚さで堆積している。床下第3層上面は濃い茶褐色の厚さ2~3cmの鉄分沈着層があり、青灰色細砂層となる。第4層は第3層が若干暗色味を帯びたもので遺物を含んでいる。遺物は細片で、量的にも少ない。第3層上面でピットを検出した。径10cmのもので人為的なものか不明確である。第5層は青灰色細砂層で固く締ったものである。この上面は南北方向に細い溝状の凹凸があり、畑や水田の耕作の痕跡または轍の痕跡とも考えられた。

第6グリッド 第3層は暗黄褐色砂質土層であるが土器の細片を若干含み、第4層が包含層となる。この下面是第5グリッドと同じ南北方向に細い筋状の凹

凸面となっており、この面で径40cm、深さ30cmのピットを検出した。中から板状の木片・澄明皿片等を出土した。遺物包含状態は第5グリッドと同じである。



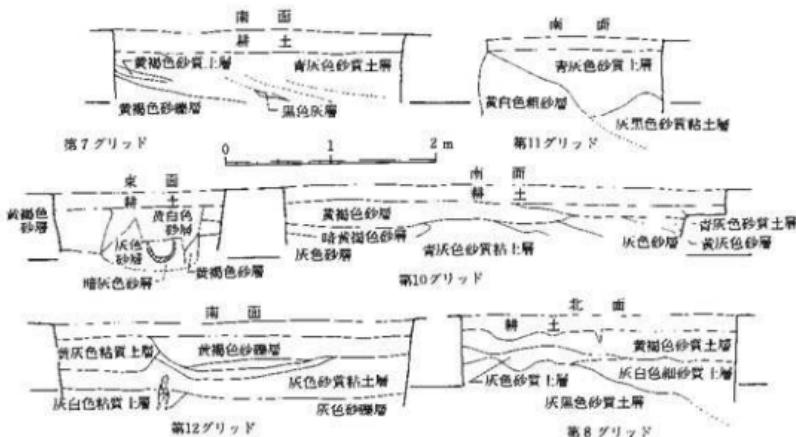
第7図 第5グリッドの状態

第4調査地点

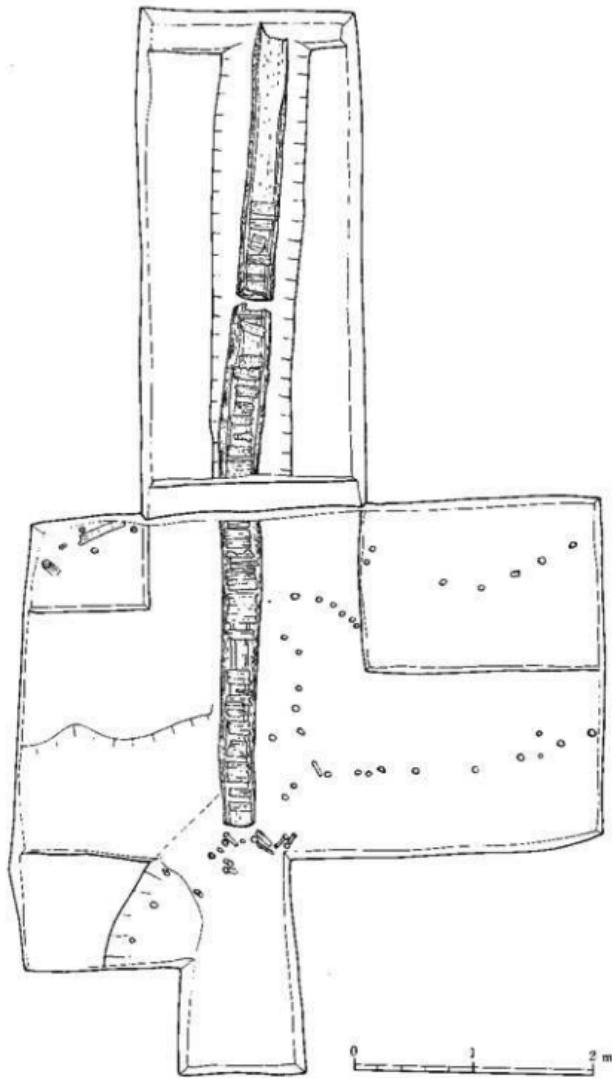
第7・10・11グリッド

第7グリッドは $3 \times 3\text{ m}$ のものを設定したが、杭列と北壁に太い木材を検出し、北側 2 m を拡張した。木材は径 30 cm のものの上端部を削り、中心部をくり抜いたもので、上部に小さな板を被せて埋めこんだ暗渠の施設であることが判明した。このため東側に第10グリッド、西側に第11グリッドを設定して調査を進めた。暗渠に使用されている木材は長さ 6.8 m をはかる長いもので、第10グリッド東端で終り、さらに東側に別の用材を接続している。西端は第7グリッドで終り、この付近に多数の杭を打ちこんでいる。杭は第11グリッドから第7グリッドにかけて列をなし、西北西から南南東方向にカーブしている。

これらのグリッドにみられる堆積状態は、第1層耕土を取り除くと砂の層となる。砂は第10グリッドでは耕土に接して水平の状態を示すが、第7グリッドでは杭列のカーブにそって西あるいは南方向に傾斜して堆積している。さらにこの傾きは第11グリッドにもみられる。これらの状態から判断するかぎり、これらの杭列は川岸に打ちこまれたもので、暗渠の施設はこの岸から水を引きこむためのものであると考えられる。杭列はこの他に2列みられ、川岸の変更にともなって西側へ打ち変えられたものと考えられる。杭の用材は径 4



第8図 第4調査地点断面図

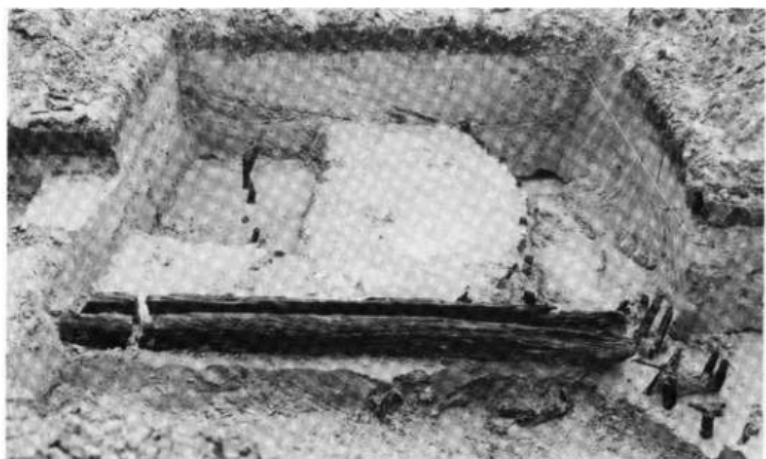


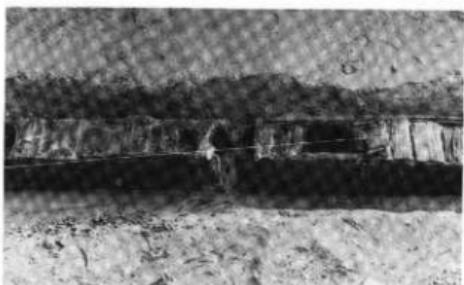
第9図 第4調査地点第7・10・11グリッド平面図

第10図 出土状態 ▶



第11図 出土状態 ▼





第12図 蓋板の状態

~6cm位のものの先端を加工したもので、ほとんどが松材であり、北西部に若干竹材がある。東側下層の杭列は若干太めのものを使用している。

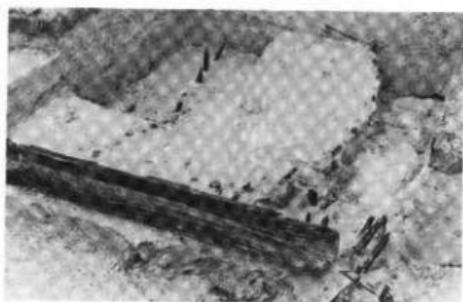
第1層耕土下
第8グリッド
は黄褐色砂質土

層である。第3層は西側が灰色粘質土層、東側が灰白色砂層となり、

第4層上面の傾きの上に堆積している。第4層は黒灰色の砂質土層で遺物を包含している。遺物は細片が多いが中世に属する瓦器・土師器・須恵質土器などで、あまり磨滅していない。この層の底面は隣接する水路からの湧水のため確認できなかったが、1m位は続く厚いものである。この層の傾きによって、第7グリッドで確認した川岸は確実となり、第8グリッドの西側に西岸にあたる部分があるものと考えられる。

耕土下に約20cmの黄褐色砂質土層があり、すぐ第3層青灰色砂質土層
第9グリッド
となる。湧水のためこれ以下は掘り下げ得なかったが、遺物として青磁の比較的大きな破片を出土した。

第7・第8グリッドの状態から考えられる川岸の方向を確認するため
第12グリッド
に設定した。これによると第7グリッドの杭列は第12グリッドに続いており、川は南南東方向に続いて行くものと考えられる。



第13図 杭列の状態

第3調査地点

耕土下は
第1グリッド 黄褐色砂質
土層からなる床土で、この下
面に鉄分の沈着層がみられる。
この下に黄灰色～青灰色の砂
質粘土層があり、第5層暗灰
色粘土層の下面に若干の土器
片を包含している。この下に

は青灰色細砂層があり、さらに植物を含む黒色粘土層が50～60cm堆積している。包含層下
のものは自然状態における堆積であると考えられる。出土遺物は瓦器・土師器等である。

包含層の上は第1グリッドと全く同じ状態を示している。この下層は
第2グリッド 黄灰色の砂質粘土層となり、北西隅に暗灰色の砂の落ちこみがみられる。
これは人為的なものではないと考えられる。

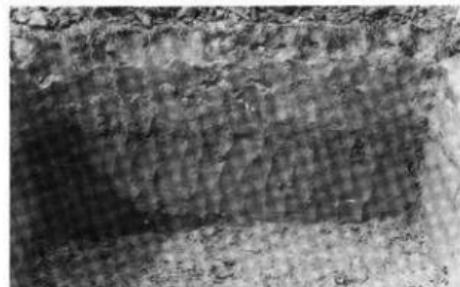
耕土および第2層床土下には第1・第2グリッドでみられた鉄分沈着
第3グリッド 層がみられない。また、この下層が灰褐色粘土層であることも異なっている。
第5層青灰色砂層中に若干の中世遺物を混入している。包含層下は青灰色～黄灰色
の粘土層となる。

耕土下は黄褐色系の砂層からなり南東方向へ傾斜しており、他の3グ
第4グリッド リッドで見られない状態を示している。中世遺物は暗青灰色細砂層に含
まれるもので、その下黄灰色粘土層を挟んでみられる暗灰色粗砂層中にも摩滅した土器が
流れこんでいる。包含層から
打ちこんだ杭を南東隅で検出
した。またその周辺には南東
方向につづく流木等がみられ
た。何らかの流れを有する部
分の堆積状態を示している。

以上今回の分布調査では4
調査地点に16箇所のグリッド
を設定した。

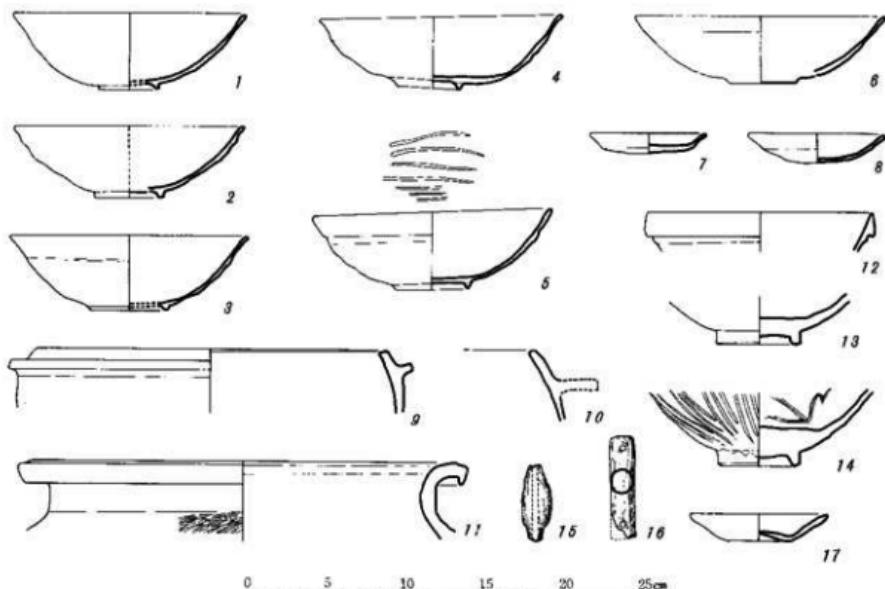


第14図 全 景



第15図 第2グリッド北面

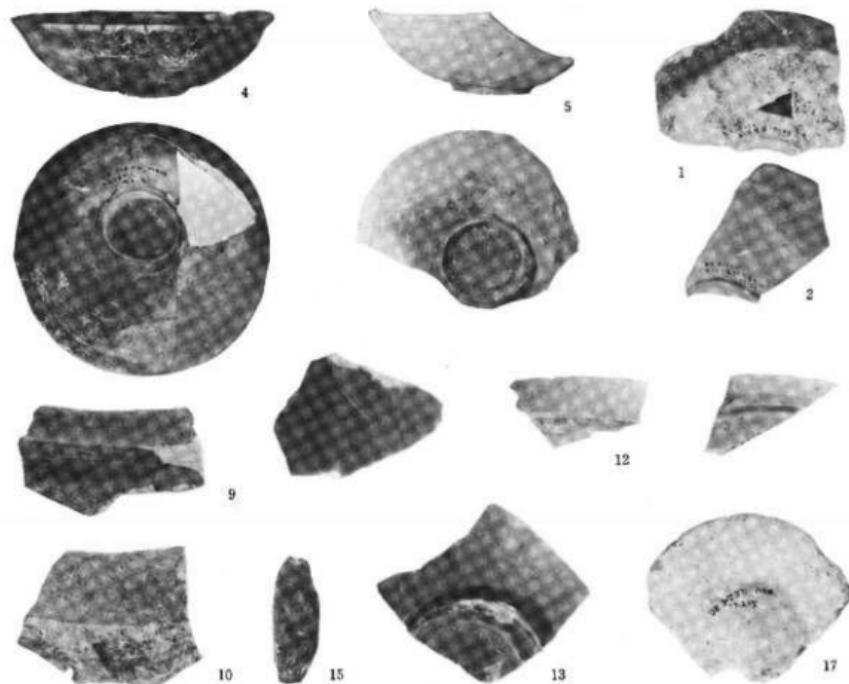
出 土 遺 物



第16図 出土遺物実測図

今回の分布調査において出土した遺物は、コンテナ4箱に分納しうる土器類と、第4調査地点で出土した木棒材・杭などである。その内容は主として中世に属するものであり、下層から若干古い時期のものが出土している。

古い時期のものとしては弥生式土器がある。弦形土器の口縁部で、端部をつまみあげて端面を作り、この下方に刻目を施したものである。赤褐色の色調を呈しているが、器表は極度に摩滅して整形法等の細部は観察できない。頸部には2条の横描直線文が認められるが、明瞭でない。おそらく棒一本づつが明瞭に別れる中期第2様式的なものであろうと考えられる。また底部がある。径の小さい厚いもので後期第5様式のものと考えられる。この他横描波状文の破片なども含まれているが、摩滅したものが多く、砂とともに流されてきたものである。底部は第1調査地点第2グリッドの最下層から出土したもので、この部分には黒色粘土層があり、弥生時代後期の包含層を有する可能性がある。



第17図 出土遺物

弥生時代以降、中世に至るまでの時期の遺物も点々と出土している。須恵器類の他にも奈良時代に属すると考えられる土師器類や黒色土器の破片等も含まれている。しかし、これらは、弥生式土器等とともに瓦器を含む層から出土したものが多く、整地などにより擾乱し、二次的な堆積を示しているものと考えられる。

明瞭に包含層を形成し、遺構に伴なって出土した遺物は瓦器を中心とするものである。第16図に示した遺物の内、(1)～(11)・(15)は瓦質の土器類であり、(12)～(14)は陶磁器類、他は土師質の土器類である。(1)～(8)は第1調査地点第1グリッドの包含層及びこの落ちこみ内から検出したもので、(1)～(6)が橢形、(7)～(8)が皿形の器形のものである。これらの土器は口縁部内外面を横ナデしたのち、内面にヘラミガキを施したもので、外面の大半は手ヅクネのままの痕跡を残したあらい整形を行なっている。内面の暗文は明瞭なものが少ないが、

(5)の上器にみられるものは、底部内面に平行線状のもの、その上部に円形に回るもののが2条ほど認められる。高台は(1)～(3)のように角張ったもの、(4)～(5)のように断面三角形状のものもある。(7)～(8)のうち(8)の内面に暗文が認められるが、明瞭なものでない。(9)～(10)は七釜の口縁部で(10)は口径の復原しにくいものであるが、(9)よりは大形のものと考えられる。内外面とも横ナデの整形を行なうもので、鉄釜状の段を有するものではない。(11)は菱形七釜の口縁部と考えられるが、胴部外面に4本 / 1cmのタタキ目がみられる。(12)～(14)のうち、(12)は白磁、(13)は青磁、(14)は灰釉陶器である。(12)と同様のものは第1調査地点第3グリッドの落ちこみ中より出土している。(14)は第3地点第4グリッドの上部の層から出土している。(15)～(16)は七釜で、(15)は瓦質のものであるが、(16)は七師質のものである。(17)は燈明皿で、底部中央が四状の上げ底で、横ナデの整形を行なったものである。

以上今回の出土遺物について明瞭な包含層から出土したものは瓦器類を中心とするものでありこれらの形態からみて13世紀頃のものと考えられる。

ま　と　め

今回の分布調査では計16個所のグリッドを調査した。これらの中において最も良好な遺物包含層を有する個所は第1調査地点第1・3・4グリッドであり、第1・4グリッドで検出したピットや第3・4グリッドで検出した大きな落ちこみ等は何らかの遺構の一部と考えられる。第2グリッドにかけて住居跡等の検出される可能性の高い地域である。第2調査地点第6グリッドにみられたピットも人為的なものであり、周辺の検討をする。

もう一点の成果は第3・4調査地点で検出した旧河道の遺構である。特に第4調査地点第7・10・11・12グリッドで検出した部分は河道東岸の杭列であり、河岸の移動の状態も明らかにし得た。河岸西側については調査用地外となるため明らかでないが、第8グリッドの状態から幅10m位はあり、北から南へ流れる大きな河道である可能性が高い。河道と考えられる状態は第3調査地点第4グリッドでもみられたが、第4調査地点との関係はもう少し検討を要する。しかし、河道としてはこの方向から流れてくるものとするのが最も妥当な見解である。南への方向については第12グリッドへ続き若干東へ振った方向をとる可能性が強い。

第7・10グリッドで検出した暗渠の施設は、長さ6.8m、太さ28～30cmの材の皮をはつり、上面になる部分をはつた後、中央を掘り譲めてU字型にしたものである。埋め込む際の蓋板は幅10～20cm、長さ約30cmの小さな板を本体と直交する方向に数多く數き詰めたも

のである。この施設の性格については、小曾根村では村の中央に共同井戸があり、高川から水を引いて使用していたという話が参考になる。おそらく、この施設もこれと同様の性格を持つもので、暗渠とするより上水を引きこむための樋であろうと考えられる。なおこれらには竹の管が多く利用されていたようである。

旧河道および樋についての年代決定は今回の調査では明確にし得なかった。これは、これら遺構にともなう明確な出土遺物がないことによるものである。

年代推定の材料としては、旧河道については江戸時代の絵図面にこの通りの南北に“中ミゾ”と呼ばれる水路が描かれていること、この水路が今西氏屋敷跡の東限を区画するものであることなどからみて中世から近世にかけて流れていたものであると考えられる。しかし、水路の幅は予想以上に広いものであることや、杭列が南北直線的なものでないことなどから、それほど新らしい時期のものとは考えられない。一方、樋についても、この遺構が現水田耕作下から掘りこまれていることから新らしい時期のものと考えられるが、多く竹管が利用されていたのとは異なり太い木材が利用されていることや、地主の伝承が全くないことなど、近世でも古い時期のものと考えられる。

最後にこの付近の土層の形成過程を概観してみたい。普通豊中の南部地域の床上は黄褐色粘質土層で、砂を含む場合でも砂質粘土層とよんでいる。しかし、小曾根地区の場合には水田耕土下は黄褐色砂質土層で、砂粒を多く含んでいる。床土とよんでいる層は黄褐色系の上に、細かい観察を行なえば無数の水平ラインからなっている。これは年々の水田耕作によって引きこまれた水によって運ばれてきた土であることを意味し、小曾根地域の場合はこの底土の形成期、特に近世に多量の砂を運んできた様子がうかがえる。この事は東西を流れる高川・天竺川がバスが下を通るほどの天井川を形成していることと無関係ではないと考えられる。

一方中世に属する土器等を包含する層以下は、若干の砂を挟む場合もあるが、基本的に青灰色細砂層と細かい砂がベースとなっている。これらは湿地的な要素をもって堆積したものと考えられ、さらに下層には厚い粘土層などがみられる。

すなわち、この付近では弥生時代から中世にかけて比較的安定した状態で堆積が進んでいるが、中世以降千里丘陵から多量の砂が流出したことにより高川・天竺川等は川床が高くなり天井川を形成したのであろう。これらの原因としては近世新田開発等と関係があるのかも知れない。